こども食堂の認知と充足率の向上

指導教員　　金沢学院大学　教授　広根礼子

参加学生

４年	荒川七菜	香川椎奈	鈴村匡樹	髙島彩乃	中栄輝
	中島なの子	中波杏奈	中村はるな	山賀玲菜	松本啓寿
３年	熊谷日菜子	清水仁美	高橋萌絵	瀧本楓佑	藤井文音
	本田鈴音	山下祥希	横井香澄		

能登半島地震からの一日も早い復興を心よりお祈りいたします。
本活動で協働させていただきました、おおくわこども食堂、かなざわっ子 nikoniko 倶楽部、
その他、活動に参加してくださいました皆様に感謝申し上げます。

広根ゼミとこども食堂 活動動画　YouTube Video　2021～2024 年度

2021 年度　　2022 年度　　2023 年度　　2024 年度

広根ゼミ Instagram

こども食堂の認知と充足率の向上

金沢学院大学ヒロネゼミ

おおくわこども食堂・かなざわっ子nikoniko倶楽部

3年：熊谷日菜子　清水仁美　高橋萌絵　瀧本楓佑
藤井文音　本田鈴音　山下祥希
4年：荒川七菜　香川椎奈　鈴村匡樹　髙島彩乃
中栄輝　中島なの子　中波杏奈　中村はるな
山賀玲菜　松本啓寿

活動の背景

こどもがこども食堂に1人で歩いて行ける距離を考慮すると、小学校区に1か所、こども食堂が存在していることが理想です。

活動の目的

能登半島地震と豪雨により、被災地のこども食堂は開催が困難な状態となり、県内のこども食堂の状況は大きく変化している。

能登地域には元々こども食堂が少ない（珠洲市はゼロ）。そこで、被災者を対象に、一緒に集うあたたかい居場所として「出張こども食堂」を開催し、自分の地域にも、このような場があったらいいなと感じてもらう。数年後の復興を見据えて、能登地域のこども食堂再建と新規立ち上げに繋げる活動に対して、ゼミの特性をいかして貢献したい。

活動の内容

6月 能登半島地震応援グッズのデザイン

持ち寄ったアイデアを検討

投票の結果、選ばれたデザイン

7月 「出張こども食堂」in金沢（金沢学院大学）

ゲームでアイスブレイク

集まったみんなで会食

子どもは、フェルトのワークショップ

大人は、こども食堂について考えるワールドカフェ

8月 能登半島地震応援グッズ制作

シルクスクリーン印刷の様子

トートバッグとレジかごバッグ

10月 被災者を対象とした「出張こども食堂」in七尾

こどもは、大広間でフェルトのワークショップ

集まったみんなで会食

11月 「出張こども食堂」in田鶴浜

参加者全員で記念撮影

バッグにつめた食材を、参加者に配布

カレー、綿菓子、ポップコーンを提供

来場者にレジかごとトートバッグを配布

12月 こども食堂10周年記念全国ツアー「公開ワークショップ」

グループトークの様子

参加者と記念撮影

活動の成果

能登半島地震支援グッズが好評

復興を願うメッセージをデザインに込めて届けることができた。自分達も使うことで、能登への思いを忘れない、と話し合った。

出張こども食堂では

2次避難者や被災者と、食事やワークショップを通じて話を聞く事ができた。会話の中から、こども食堂の内容が知られていない現状があることがわかり、認知向上のためにアプローチし続けなければならないと改めて実感した。

公開ワークショップでは

こども食堂の現在地を知ることができた。このような場に学生が参加することで、こども食堂の意義を理解し、周りに伝えていくことの大きな価値を実感した。

地域からの評価

学生は回を重ねるごとに子どもとの関わりがスムーズに且つ上手になっていく姿があった。ワークショップの内容が充実しているため、こども食堂の参加のしやすさに繋がった。

「公開ワークショップ」

＜こども食堂運営者のエピソードトークから＞

陣痛がきてもお弁当を受け取りに来るお母さんがいた

ボランティアの高校生が、先生には話せなかった悩みをスタッフに話すようになった

不登校だった子どもが友達を作ることができた

家では食べない料理でも、こども食堂では残さずに食べる

＜学生の感想から＞

食べるという行為に嫌悪感を感じさせないように、食べる行為が楽しいと感じさせられたらいいなという話がとても印象に残った。

直接何かのお手伝いできているという実感があまり無かったが、私たち学生がこども食堂という言葉や意味を知っていたり周りに伝えたりするだけでも心強いし嬉しいと言われたことがとても嬉しかった。

2024年12月の時点で、石川県のこども食堂の数は、前年度比10カ所増の98カ所で37位。こども食堂のある小学校区の充足率は、35.15%（前年度33%）で17位となった。本活動の貢献度は数値化できないが、一端を担うと捉えたい。

1. 活動の要約

本活動では、こどもの居場所や地域の交流の場として、近年ますます重要性が高まっているこども食堂が担う役割に着目し、活動を継続してきた。昨年度からは、こども食堂のない地域に出向き、認知向上を目的とした「出張こども食堂」を開催している。今年度は、令和 6 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震の 2 次避難者および被災者を対象に、「出張こども食堂」を金沢と七尾で開催した。地震からの復興を願うメッセージを込めたトートバッグとレジかごバッグをデザインし、食材などの支援物資を詰めて「出張こども食堂」に参加した被災者に配布した。また、認定 NPO 法人全国こども食堂支援センターむすびえ（以下「むすびえ」）が、こども食堂開設 10 周年の節目を記念し、全国の都道府県で行っている「公開ワークショップ」の石川県バージョンの開催をサポートした。

2. 活動の目的

こどもが 1 人で歩いて行ける距離を考慮すると、小学校区に 1 ヶ所、こども食堂が存在することが理想である。能登半島地震により、被災地のこども食堂は開催が困難な状態となり、県内のこども食堂の運営状況は大きく変化した。そこで今年度は、不安を抱えた生活を余儀なくされている被災者を対象に、こども食堂が精神的な拠り所となることを願い、活動を行った。もともと能登地域にはこども食堂が少ない。一緒に集うあたたかい居場所として「出張こども食堂」を開催し、参加した被災者に、自分の地域にもあったらいいなと感じてもらう。数年後の復興を見据え、能登地域のこども食堂再建と新規設立の後押しを行い、充足率の向上を目指す。

3. 活動の内容

今年度の取り組みは、3つに別けることができる。能登半島地震支援グッズ制作・出張こども食堂・公開ワークショップであり、積極的に本活動報告の機会を設け周知に務めた。表1からは除外したが、大学の定例ゼミにて、ミーティング・視察・進捗確認を実施した。主な活動を表1に示す。

表 1　活動内容

日時	実施内容
5 月 24 日	キックオフミーティング
6 月〜8 月	能登半島地震 支援グッズ企画デザイン
7 月 27 日	出張こども食堂 in 金沢（金沢学院大学）
8 月 30-31 日	能登半島地震 支援グッズ制作（金沢湯涌創作の森）
10 月 6 日	出張こども食堂 in 七尾（矢田郷地区コミュニティセンター）・被災地視察
11 月 9 日	出張こども食堂 in 田鶴浜（旧中村呉服洋品店）※1
11 月 21-24 日	第 51 回 石川県デザイン展　活動報告パネル展示（しいのき迎賓館）
11 月 23-24 日	冬服持ってけ市（辰巳丘高校）※2
12 月 1 日	公開ワークショップ・活動報告パネル展示（(駅西福祉健康センター）
12/6-8 日	まちなか芸術祭 2024　活動報告パネル展示（しいのき迎賓館）
12/14-15 日	学会ポスター発表（アートミーツケア学会 2024 年度大会・九州大学）

当初、活動計画にはなかったが、支援グッズをより多くの被災者に届けるため、出張こども食堂 in 田鶴浜（※1）に参加した。また、学生ボランティアの要請を受け、企業が一般から集めた大量の冬物衣料を、被災者や子育て世帯、困窮世帯に配布するための準備にゼミの有志が携わった（※2）。いずれの活動も、微力ながら被災者支援につながることを願って参加した。

(1)　能登半島地震支援グッズ制作

6 月、学生は支援グッズについて検討を重ねた。通学に使えるトートバッグと、こども食堂から要望のあったレジかごバッグを制作することに決め、デザインに取りかかった。トートバッグは、8 月末、金沢湯涌創作の森シルクスクリーン工房にて、1 泊 2 日の日程で、約 50 枚を刷り上げた。レジかごバッグは、複雑な形状特性による制作ロスを避けるため、印刷は業者に発注した。

アイデアの検討

シルクスクリーン印刷

能登をイメージしたデザインのトートバッグ 2 種

「Smiles for Noto」メッセージ入りレジかごバッグ

(2) -1　出張こども食堂 in 金沢（金沢学院大学）　　対象：2 次避難中の子育て世帯

7月、参加者が構内で迷わないように動線確認・開催告知のフラッグ制作・ワークショップの準備を重ねた。当日、宝達志水・珠洲・輪島で被災した2次避難中の家族30人（こども19人、大人11人）が参加した。食事の際に、被災の現状、2次避難先の学校の感想などに話題が及んだ。食後、ゼミはこども向けワークショップを運営し、フェルトボールのストラップを作った。こども食堂は、大人を対象にワールドカフェを開催し、自分の地域でこども食堂をやるとしたら？というテーマで話し合った。ゼミとこども食堂スタッフ、県の健康福祉部担当者等、総勢60人が参加、新聞報道もされた。

豚丼とワッフルの昼食を食べながら歓談

ワークショップの様子

(2) -2　出張こども食堂 in 七尾（矢田郷地区コミュニティセンター）　対象：子育て世帯の被災者

10 月、会場設営後、短い時間ではあったが、地元佐藤喜典市議立ち会いのもと、学バスで近隣の被災地を視察した。当初、申込者数が少なかったが、当日になって、会場内に 10 本掲示した大きなオレンジ色の出張こども食堂のフラッグを見て、興味を抱いたという被災家族で満席となった。アイスブレイクとして行ったビンゴゲームの後、2 会場に分かれ、ゼミはこどもとワークショップ、こども食堂は、大人に向けてワールドカフェを運営した。おやつに、ケーキとポップコーンを振る舞った。お土産にトートバッグとレジかごバッグに食材や支援物資を詰め、ひと家族 1 セット配布した。参加者は、13 家族 43 人（こども 29 人、大人 14 人）、総勢 70 人が参加し、賑やかなイベントとなった。

参加者

トートバッグとレジかごバッグに支援物資を詰めて配布

(2) -3　出張こども食堂 in 田鶴浜（旧中村呉服洋品店）　対象：被災者

11月、まんぷく食堂が初開催するこども食堂に、支援グッズを持って駆けつけた。その場には多様な支援者が集い、トラックを改造した移動式遊び場にこども達が歓声をあげていた。「ずっと解体工事の音しか響いていなかった通りに、子供の笑い声が聞こえている」と、近所の住民が次々と訪れ、参加人数は80人にのぼった。

(3)　公開ワークショップ（駅西福祉健康センター）

12 月、「公開ワークショップ」全国ツアーの石川県バージョンをサポート。NPO 法人ささえる絆ネットワーク北陸代表理事による開会挨拶のあと、ゼミの代表学生が、本活動について発表した。会場内に活動報告パネルも展示した。公開ワークショップは、こども食堂運営者のエピソードトーク・共感したエピソードについて話し合うグループトーク・企業の支援活動発表の 3 部構成で進行した。

グループトークの様子

参加者

エピソードトークでは、21 才から定年を機に開設した人まで、様々なバックグラウンドを持つ 5 人が登壇した。家では食べない料理でもこども食堂では残さずに食べる、不登校だったこどもに友達が

できたなど、継続のモチベーションに繋がるエピソードを披露した。グループトークには、ゼミも加わり付箋を用いて話し合いが行われた。企業の支援活動発表では、廃棄食材の寄付によるフードロスの減少などの実施例が紹介された。県の健康福祉部担当者も行政の立場で発言した。発言者は自らの活動意義を再認識、聴衆は応援したくなり、会場は一体感に包まれた。こども食堂の認知の重要性を相互に実感する貴重な場となった。当日の様子は、むすびえのホームページで確認することができる。
（https://ks10th.musubie.org/zenkoku/list）

4. 活動の成果

能登半島地震支援グッズとして作成したトートバッグとレジかごバッグは、配布した被災者に好評を得た。復興を願うメッセージをデザインに込めて届けることができたと感じる。学生は、自分達もバッグを使うことで能登への思いを忘れない、と話し合った。

公開ワークショップでは、こども食堂の現在地を知ることができた。このような場に学生が参加しすることで、こども食堂の意義を理解し、周りに伝えていくことの大きな価値を実感した。

昨年 12 月の時点で、こども食堂の数は、全国で前年度比 1734 ヶ所増の 1 万 866 カ所となったことが、むすびえの調査で明らかになった。都道府県別では東京都が 1160 ヶ所で最多だった。石川県は、前年度比 10 カ所増の 98 カ所で 37 位。こども食堂のある小学校区の充足率は、35.15%（前年度 33%）で 17 位となった。本活動の貢献度は数値化できないが、一端を担うと捉えたい。秋に出張こども食堂を開催した七尾市では、小学校 10 校に対してこども食堂が 11 ヶ所となり、「小学校区に１ヶ所のこども食堂」という目標を達成した。

5. 今後の活動計画

本年度の活動で明らかになったことは、一般の人々にとって、「こども食堂は誰が利用して、どのような場所なのか」まだよく知られていない、という現状である。これまでの継続的な活動によって得られた成果を踏まえ、次年度は、次の 2 点に取り組む計画を立てている。

1. 能登方面のこども食堂空白地帯で出張こども食堂を開催し、新規設立のアプローチを行う。
2. こども食堂が、不登校や発達障がいを抱える当事者や保護者が集える場として機能していることを、検証し周知する。

5. 活動に対する地域からの評価

今年度第 1 回目の出張こども食堂では、能登から避難してきた参加者が集まったことで、震災の時に怖い思いをしたことや、2 次避難先での生活の苦労などの思いを共有し合う場面が見られた。ワークショップを通して子どもと学生の関係が深まり、その後の会食で一緒にご飯を食べている姿に、これぞこども食堂というのを感じた。

第 2 回の出張こども食堂では、震災の被害があった地域での開催。七尾市には既にこども食堂が数か所あるが、「こども食堂は自分たちに関係がないところだと思っていた」「こども・大人だけで参加して良いんですね」とコメントをいただいた。また、学生のワークショップを同時開催することで「イベントと一体型で参加しやすかった」という意見もあった。以上からこども食堂があるところもないところも、こども食堂認知向上のためにアプローチし続けなければならないと改めて実感した。

2 次避難者が集えるこども食堂を開催することができ、こども食堂がほとんどない能登の人達にこども食堂の雰囲気を感じてもらうことができた。新規立ち上げの後押しに繋がるワールドカフェを開催できたことで、参加者に自分事としてこども食堂はどのような場所であると良いかの気付きを促すことができた。学生は、回を重ねるごとに子どもとの関わりがスムーズに且つ上手になっていく姿があった。ワークショップの内容が充実しているため、こども食堂の参加のしやすさに繋がった。